

体育祭



写真や答辞から、この時期の体育祭・文化祭が、生徒にとってどのようなものであったのかが感じられる。

文化祭



答 辞

【昭和48年度卒業式・答辞より抜粋】

先生の教えの内から、あるいは志を共にしている友から励まされ、歩んできた面も多々あったのではないのでしょうか。それは私達が四年間行ってきた、体育祭、文化祭、球技大会等の行事についても言えることだと思います。一つの事をクラスの友が協力し合って成し得た時の満足感、喜びは、他に例えようがありませんが、その反面なかなかまとまらずに共に充実感を味わうことの出

来なかった時は、非常に空しさがこみ上げてきたものです。改めて人間の和の難しさを知った思いがしました。この様に私達が学んできた事は、ただ単に学業だけでなく、それにも増して人間社会に於ける人間関係というものを教訓として教えてくれたと思います。学校というよりも、共に目標を目指して様々な喜怒哀楽を分け合うといった雰囲気の時制高校でありました。

修学旅行



写真は昭和43年のもの。



ハイキング



思い出すこと (本校50周年記念誌より)

本校元教諭 松本 巧晴

鎌倉時代初期の或る人の歌に「月影の至らぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ」というのがあります。私達は小中高と学校で学ぶ事は、教育の機会均等によって戦後いつでもどこでも、だれでも平等に受け入れられるようになりました。月影は教育であり、眺める人は学ぶ人の姿であると思います。吹田高校定時制で定年後の講師を含め32年間お勤めさせて頂きました。そして主に国語の本を読むことに終始したように思います。国語の本を通じて学ぶこと、人と人との交流によって私自身育てられたように思います。

かつて定時制にお勤めする時間の前に、暇な折に時々京都西京の善峰の山麓にいらっしゃった或る老学者のものとインド古代の書物で阿毘達磨俱舍論(アクダツマクシャロン)という不思議な書のお話を聞きに行ったことがありました。初めは何が何だか難解でさっぱり分からぬ話でしたが、4・5年経つうちにおぼろげながら少し書物の輪郭が浮かんできました。

昔から桃栗三年柿八年と言うように実が成るまで、それだけの年数がかかるという諺があります。そのように古代インドの論書もこの諺にかけて唯識三年俱舍八年と昔から阿毘達磨俱舍論を日毎学んでも理解出来るまで8年かかると言われています。何れの書物にせよ時代を経て生きている古典を理解することはなかなか容易なことではありませんが、しかし力を尽くしてそれを学ぶことによって必ず心の糧つまり血となり肉となることと思います。

昭和40年私が吹田高校定時制に赴任した頃、入学の生徒数が一番多かったように思います。その頃丁度産業の高度成長期で地方からの集団就職の女子社員、准看護婦、国鉄、郵便局、市の職員など皆目的を持って定時制に通っていました。その頃戦中戦後の名残りがまだあったのか、生徒の服装も紺か黒の学生服かスーツが大半で授業も整然としていました。国語の古典の授業でも1人ひとりが読み、訳し、文法も出来たように思います。

給食はパンと牛乳だけ、それが10年ほど続いて完全給食になり、御飯と副食も出るようになりました。給食の中でもカレーライスが一番好まれるようになり、かわりする生徒もいたほどです。図書館の蔵書も多くなり、生徒の服装もカラフルになり、総べての面で豊かになったと思います。生徒と先生のコミュニケーションも豊かになり、和気藹々と交流が出来るようになりました。いつだったか忘れてしまいましたが、授業が終わって廊下を歩いていると後ろから「モモンガ」というささやきが聞こえてきました。これは私のニックネームだと思って家に帰って話すと、2人の娘が声をそろえて「可愛い名前を付けてもらったやん...」と聞いてくれました。私もそうかなと思って悪い気がしなかった。その後生徒の数が漸次少なくなり、同じ4年生担任であった千頭先生と修学旅行に行くことができました。希望者が少ないので、添乗員なしで教師2人と10人余りの生徒と共に電車で定期バスを乗りついで東北の平泉へ行ったことがありました。大変のんびりと家族旅行のような感じで楽しいひとときでした。

過ぎし日を思えばしんどい時もありましたが、それも今では懐かしい思い出になっています。現在急速な社会の変化と共に学校の現状も随分変わったと思います。古希を過ぎた今、ありし日を思い出しつつ、うたた今昔の感にたえない次第であります。